

週日の説教

金 大烈 神父 2009年2月20日(金)

《悲しみの中の希望 ~金 壽煥(キム スファン)ステファノ枢機卿の死に寄せて~》

今日、午前10時から2時間くらい、韓国が一番大きい4つの放送局全てで、ある人のお葬式のミサの中継放送がありました。その方は、私を叙階して下さった、金 壽煥(キム スファン)ステファノという枢機卿です。

昨年、私たちが韓国を訪問した時に出会った枢機卿は、もう一人の枢機卿、鄭 鎮奭 (ジョン ジンソク)ニコラオ枢機卿です。ジョン ニコラオ枢機卿の前に、初めて枢機卿になられた方が金ステファノ 枢機卿です。

その方が、月曜日に老衰のため、87歳で帰天されました。その後3日間、明洞(ミョンドン)大聖堂では弔問客を受け入れました。明洞(ミョンドン)大聖堂に集まった弔問客だけでも40万人になりました。3日間に40万人が明洞(ミョンドン)大聖堂に集まり、一緒に悲しみました。各教区の全ての教会まで考えてみれば、2000万人近い人々が弔問をしたと思います。明洞(ミョンドン)教会だけでも、3秒間の弔問のために酷寒の中にも係わらず3時間も4時間も外で並んで待っている人々が殆どでした。カトリック信者だけではなく、仏教の信徒やあらゆる一般の人々も全て含めて、そのように悲しみを表したのです。

私も今日は涙を隠してテレビを見ることが出来ませんでした。そして、なぜ、一人の人の死によって一つの国全体がこのように騒ぐのか、なぜ政治家から貧しい人々まであらゆる種類の人々が悲しむのかを考えました。人が誰かの死によって悲しむ理由は、この世ではその人にもう再び会えないからです。では、どういうことをした人だから人々がこのように悲しみを表したのでしょうか。

金ステファノ枢機卿が亡くなってから、いろいろな秘話があちこちから現れました。そして、個人的な体験や彼と出会って感じられた話などが、満ち潮のようにインターネットで掲載されたのです。

有名な物語だけを紹介します。

彼は、日本の上智大学で2年生まで勉強し、日本軍に徴兵され、戦争が終わってもそのことを知らずに南太平洋のある島にいました。そして、終戦の便りが届いて日本に帰ります。それから韓国のカトリックソウル大学に入り、司祭に叙階され、47歳の若い年で枢機卿になられた人です。

1970年代、朝鮮半島の南側(韓国)は、独裁政治で殺伐な時期でした。夜12時を過ぎたら通行禁止があるような厳しい時代でした。その時代、労働者達や学生達、政治に反対するいろいろな人々によってあちこちでデモが起こされました。デモを起こした人々が、追いかけて逃げた場所が明洞(ミョンドン)大聖堂でした。政府は、軍人や警察官を派遣し、デモを抑えようとしていました。ある日、彼が一番有名になった話ですが、警官達の前に学生達がバリケードを築いたとき、彼が現れて、警官達に「あなたたちが、この学生達、労働者達を攻めるのなら、まず私を踏んで行ってほしい。私の後ろには司祭達が待っていて、その後ろにはシスター達がいる。まず私を踏んで進んでください。」と言った姿が中継で放送されたのです。

そして次の年、クリスマスのミサの中継放送でも独裁政治を行なう大統領を厳しく非難する話をしたのです。



それ以来、人々は何かあると明洞(ミョンドン)大聖堂に逃げ込み、助けを求めようになりました。彼は、そのように政治に反対する人々に影響を与える人物となったのです。

そして1980年代に入ると激しい民主化運動がありました。その中で、現在ではみんなが認めているような韓国の民主化は、司祭達によって行われたのです。一番前に十字架を立て、神父達、その次にシスター達が続いて、命をかけて刑務所に入ったのです。そのようなできごとによって、韓国では、カトリック信者の人口がとても早く増えました。現在、韓国の人口は、5千万近くになっています。2009年度の統計調査の結果を見ると、そのうちカトリック信者は700万人を超えています。(韓国にカトリックの信仰が入ってから)たった200年の間に、そのくらい信者が増えたのです。そして、それだけ犠牲をされた人々も多かったのです。

このような話も伝えられています。彼の告白のような話ですが、次のように語った事があるそうです。「私はただの人になりたかった。しかし、それができなかった。私は、司祭になる前には、力のない弱い立場で生きている人々と一緒に生きたかった。しかし、この枢機卿という冠が自分の頭にかぶせられたため、望んでもそれができなかった。だから、出来るだけ人に知られないようにして、そのような人々と関わりをもった。」と。そのようにして彼と関わりを持った人々がとても大勢であることが新聞で明らかになりました。

また、ある記者が彼に「信仰とは何でしょうか」と質問をしたことがありました。彼は、「信仰とは、頭から胸までの旅です。私が胸まで到着するのに70年かかりました。」と答えたそうです。信仰のまことの意味、ご聖体やイエス様のまことの存在を体で感じられるようになるのに70年かかったという告白をしたのです。

彼の遺言となった最後の言葉は、「感謝します。」「愛しています。」の二つでした。そして、韓国では今、「感謝します。」「愛しています。」が流行になっていて、みんなの口に上っています。

本当に映画のようではありませんか。一人の人の死によって、なぜこのようになったのか、専門家や社会学者達は「そのくらい国民が渴いている」と言っています。「国民は、真理に、正しさに、温かさに、そして今までお金のために全てをかけて全ての関わりを捨ててしまった人間の愚かさ」に渴いている。その証拠ではないか。だから、宗教を越えて、全ての国民の流行語になっているのではないかと。

「感謝します。」「愛しています。」は、今韓国では、テレビのCMにもなっています。そのように一人の人の死によって多くの人々が動く姿を見たら、私はあらためて、希望を感じました。

今日は、韓国の気温はマイナス5 くらいまで下がったそうです。明洞(ミョンドン)大聖堂では、三万人の人々が集まっているので聖堂には入りきれません。10時のミサですが、朝6時から、聖堂に入りきれない人々が聖堂のまわりで、雪の中、ロザリオを祈りながらお葬式のミサが終わるまで見守っていたそうです。

そして、その中にはお坊さんも、牧師さんも、いろいろな種類の人々が見られたそうです。それも、今までにはなかった一つの出来事ではないかと思えます。

「感謝します」「愛しています」とともに、いつも口癖のように「優しく生きてください」とおっしゃっていた金ステファノ枢機卿の心を思うと、私たちの希望はお金ではなくて、人間自体であることをあらためて考えさせられました。

このお葬式のミサは、ジョン ニコラオ枢機卿司式のミサではなく、昨日ローマの教皇様から「これは私の名によって捧げるお葬式のミサになるように」との書簡が届いたそうです。実際には司教様が捧げたのですが、その効果は教皇様が授けることと全く同じです。悲しみの中に希望の持てた、一人の人の死ではないかと思いました。

ありがとうございました。